

関所番、猪の検分に副印の代価で種を残され
屈する

R18

2026
・
10
・
7

目次

第一話 閉めたあとの検分小屋

第二話 婆さんの手

第一話 閉めたあとの検分小屋

門のかんぬきが下りる音は樟の奥歯にまで響いた。

三日前から右の奥歯がうずいて、今日は頬が饅頭のように腫れている。おかげで昼の仕事がはかどらず、都へ送る帳面の写しが日暮れまでかかってしまった。明日の朝いちばんの荷車に預ける約束だから、今夜のうちに封をしておきたい。ところが封じ用のろうは板壁一枚むこうの検分小屋に置いてある。

樟は濡らした手ぬぐいを頬に当てたまま、帳面を受け渡す引き窓の前にかがんだ。窓は樟の腰の高さにあって手のひらが通るほど開いている。声をかけようと息を吸ったところで、先に向こうから声がした。

「砥浪さん。副印を私に預けてください」

枉だった。樟は油を惜しんで灯りをつけずにいたので、記録小屋は暗い。検分小屋のほうは引き窓のすぐ上の棚に灯明皿がのついで、隅まで明るかった。列に面した窓口はもう戸板が下りている。枉は窓口の台を背にして立ち、マントの前を留めたまま枝分かれした角をまっすぐ上げていた。鹿の耳は両方とも前を向いている。

砥浪は小屋のまんなかの腰掛けに座っていた。猪の広い鼻先を上げ、杙の倍近くある肩を丸めて、干した栗を奥歯で割っている。口の端からのぞく牙に栗の粉がついていた。

「この春から私が青を押した荷で、宿場から突き返された物はひとつもありません。水で増やした菜種油も、底に砂を敷いた麦の袋も、蜜ろうに松やにを混ぜた箱も全部この窓口で止めました。匂いで分かるんです。砥浪さんが谷の寄り合いで留守にした日、列は柵の外の曲がり角まで延びて、布の荷が山道で夜露をかぶりしました。副印が私の手にあれば、あの荷は日のあるうちに宿場へ下りていま

す。都の役人に辺境の関は通りが遅いなんて言わせずに済む。私なら出来ます。鼻も目もこの関でいちばんいい」

砥浪は栗の殻を手のひらに吐き出した。

「鼻がいいのは本当だ。お前が樽の前で鼻を動かすのを、俺は一年この腰掛けから眺めてきた」

「それなら」

「けどな、副印ってのは俺の留守に俺の代わりをする印だ。それを預ける男を俺はまだ上の半分しか知らねえ。札を読む顔と荷主に言い返す口、それに腹を立てたときの耳だ。下の半分は名簿の字で読んだだけでよ」

杵の右の耳が後ろへ動いた。

「名簿に届けてあるとおりです。隠した覚えはありません」

「字じゃ腹はふくれねえ」 砥浪は殻を足もとのむしろに捨て、膝に手を置いた。「明日、窓口を一日、一度も空けずに務め切れ。その間、俺はお前の体を検分する。お前が窓口を離れたら、その日は赤を押さねえ。荷は山で夜を越す」

「検分、というのは」

「触って嗅いで、舐める。芋を掘るのと変わらねえよ。土をどけて、折らねえように端っこまで確かめるんだ。それと、俺のちんぽ

はお前の口から欲しいと出るまで外で待たせる。待つのは得意じゃねえがそう決めた」

樟は手ぬぐいを頬から離した。ろうを借りる話は今はとても切り出せない。

柩はしばらく砥浪の鼻先を見下ろしていた。それからマントの留め紐に指をかけた。

「窓口を一日空けないのはいつもやっていることです。明日の話は分かりました。今夜はこれで帰ります。明日は夜明け前に来て水桶を満たしておきますから」

「帰るな」砥浪の腰掛けがきしんだ。「下見は今夜だ。明日の朝、列の前で初めて嗅いだんじゃ俺のよだれが札に落ちる。脱げ、杙。副印が欲しいと言ったのはお前の口だ」

「検分役は願い出た者を裸にしてから返事をするんですか」

「返事ならもうした。赤を持ってるのは俺で、欲しがってるのはお前だ。帰るんならその話も持って帰れ」

杙の耳が後ろへ寝かけて、また前を向いた。指が留め紐を一度つかみそこねる。紐を解き、マントを壁の釘に掛けた。

「荷を解いて、手は台の上へ。……お前が毎日荷主に言ってるやつだ。俺が言うのと味噌くせえな。自分で言え。言ってから脱げ」

「……私の口上です。人に言う物で、自分に言う物じゃない」

「だから聞きてえんだ」

柩はあごを上げた。のどが一度動く。

「荷を、解いて。……手は、台の上へ」

柩は左腕の腕章の結び目を解き、口にくわえた。上着の帯を解いて脱ぎ、たたんで窓口の台の端に置く。下穿きも足から抜いてその上に重ねた。腕章は何も着ていない左の二の腕に結び直す。片手と歯を使ってきつく二重に結んだ。

「腕章は外しません。関所番として受ける検分です」

「ああ。結んどけ。裸に布きれ一枚のほうで皮を半分むいた芋みてえで腹にくる」

柩は戸板の下りた窓口へ向き直り、台に両手をついて足を肩の幅に開いた。引き窓のある板壁は窓口を横から見る側にある。樟の所からは台の前に立つ柩も腰掛けの砥浪も真横になって、角の先から足もとまで残らず見えた。

柩の体は細かった。肩から腰へ木の枝のようにまっすぐ落ちて尻だけが小さく丸い。背骨の終わりにこぶしほどの短い尾がついていた。尾の裏と尻の内側には白い毛が生えていて、そこだけ灯明の明

かりをよく返した。台についた指の先は昼の印肉で青い。開いた内腿に夕方の冷えて鳥肌が立っていく。

砥浪は動かなかった。手を膝に置いたまま鼻だけを前へ出している。

杵の尾がそろそろと下がり、尻の谷間をふさいだ。

「尾」

「……冷えるんです」

「ふさぐな。その白い毛を見てるんだ。上げろ」

尾は震えながら、もとの高さへ戻った。真横の樟に見えるのは丸い尻の下の股の線である。ちんぽも金玉も下がっていないので、開

いた腿のあいだからむこうの板壁が見えた。

「お前は荷主を待たせるときあごをこう上げて札から目を離さねえだろう。待たされる側の背中はどうなるのか。肩の骨が出て腰がへこんで、尻の白い毛が逆立ってる。その下にケツ穴の色まで見える。まんこは縦にびったり閉じて、筋が一本あるきりだ。……もう少し見させろ。腹がまだ足りねえ」

「見るだけで日が暮れますよ。もう暮れていますが」

「暮れたんなら急ぐ訳もねえ。口は達者でも内腿は鳥肌だぞ。うまい物はまず匂いからだ」

砥浪は腰掛けを下りて杵の後ろのむしろに両手をついた。広い鼻先を杵の右のかかとのすぐ上に寄せる。触れはしない。ふくらはぎから膝の裏へ、そこから腿の裏へと太い鼻息が上がっていった。息の当たった所から杵の肌の毛が立っていく。尻の丸みの下まで来た鼻は、開いた股のまんなかで止まった。ふご、と音を立てて深く吸う。

「……っ、息が、当たります」

「当ててんだ。汗と印肉の油と、その奥にまだ嗅いだことのねえのがある。若い草をもんだ汁みてえなやつだ。まんこから出てる。閉じてても匂いは漏れるんだな」

鼻息が割れ目をなで上げたらしく、杢の尻がきゅっと寄ってかかとが浮いた。砥浪はもう一度吸い、のどの奥でうなってから腰掛けへ戻った。下穿きの前は座る前から大きく張っている。

杢の肩が小刻みに揺れだした。台についた腕も膝も揺れている。砥浪は眉を寄せて立ち上がり、自分の肩から厚い毛織りのマントを外すと、杢の背にかぶせた。

「冷えたか。齒の根が合わねえんじゃ声が聞けねえ。かぶってろ。俺の匂いがしみてる」

杢は肩をひと振りしてマントを床へ落とした。

「荷主に上着を貸す番人がいますか。寒くて震えてるんじゃないありません。腹が立ってるんです。一年待ってやっと口にした話を、尻を出せで返されたんだ。それでも出したんですよ、俺は。出させておいて情けで着せるのか。火なんか要らない」

砥浪は落ちたマントを拾わなかった。枡の真後ろに立ち、首すじへ鼻を寄せて太い息をひとつ吸う。それからマントを足の先で押して、枡の開いた足のあいだへ広げた。

「寒いんじゃないのか。目で見て外した。鼻で嗅ぎゃ分かったんだ。腹を立ててる汗に、さっきの草の汁が混じってる。……怒りな

がら濡らしてやがる。着ねえんならそこに敷いとけ。お前の股から落ちる物は俺のマントが吸う」

杵の耳が裏まで赤くなった。膝が内へ寄りかける。それより先に砥浪の左手が杵の左の腰骨をつかんだ。右手の太い指が尾の付け根に下りる。尾を親指で押し上げ、白い毛を逆なでにしながら谷間をゆっくり下りていく。ケツ穴の上で指の腹が止まり、ひとつ円を描くと杵のかかどが浮いた。

「っ、そこは、名簿に、届けてない、ほう……」

「上から順に下りてるだけだ。……いい匂いだ。朝に踏んだ草みてえな匂いがする」

指はさらに下りて割れ目の両側に人差し指と中指を当て、左右へ開いた。開かれた中は真横の樟からは見えない。見えたのは細い糸が一本、股の下へ垂れて灯明の明かりに光り、内腿に貼りついたことである。

「赤えな。奥まで赤くて、もう濡れて光ってやがる。見てるだけで垂らしたのか」

「んゝ……」

杵ののどが鳴った。砥浪は二本の指を離して割れ目を閉じさせ、まだ中へは入れない。まんこのふちを中指の腹でなぞって回る。ぬ

ち、と小さな音が立ち、回るごとにその音が水っぽくなっていった。

「名簿にはへその下は女のつくり、としか書いてなかった。こんなに小せえとは書いてねえ。俺の指一本でいっぱいになりそうだ」

「指一本で、いっぱいなら、検分役の指が、太すぎるん、です」

「太えのは芋掘りの指だからだ。だからゆっくり下ろす。急いだらもったいねえ」

砥浪の左手が腰骨を離れ、杙の腹の前へ回った。股へ下りた手の先は杙の腿の陰に入って樟には見えない。杙の背がびくりと反った。角の先が戸板に当たって、こつんと鳴る。

「ここか。皮をかぶって米粒みてえに隠れてやがる」

「ふ、うゝ……っ」

「名簿の字よりずっといい。指の腹にこりこり当たってくる」

「なら、名簿を、撫でて、いれば……っ」

砥浪の左の肘が細かく動き続ける。同時に後ろの右手の中指がふちをなぞるのをやめ、濡れたまんこの口へ沈んでいった。爪が隠れ、節が隠れる。杵は台のふちを握りしめ、青い指の先を白くした。指が根元まで入ると砥浪はそれを抜かずに中で曲げた。

「んゝいゝ……！」

「熱いな。焼いた芋を割って指を入れたみてえだ。……これを明日、朝から晩までやるのか。舌でもやる。舌ならこの熱いのが味で分かる」

中指がゆっくり出入りを始めた。出てくるたびに指は付け根まで濡れて光り、入るたびに、ぐちゅ、と音がする。まん汁は砥浪の手のひらを伝って手首へ垂れ、杢の内腿にも筋をつけて膝の裏まで下りていった。前に回った左手はクリを皮の上からゆるく押し回しているらしい。その拍子と杢の尾の震えが合っていた。

杢はつま先で立っていた。ふくらはぎが固く張り、尻は後ろへ突き出て、後ろの手のひらに押しつけられている。声は鼻へ抜けての

どで潰れた。

「うゝんゝんんゝ……っ、と、なみ、さ、」

「何だ、柩。もう一ぺん呼べ。今の声でだ」

「は、やい、……っ、もう、」

柩の腰が細かく跳ねだした。白い尾がぴんと立ち、内腿が太い手首を挟もうとする。

砥浪は指を抜いた。前の手も離した。両手を柩の体から浮かせ、半歩さがる。

柩の尻は抜けた指を追って後ろへ出た。追った先に何もないと分かるので止まった。尻の肉がひくひくと寄ったりゆるんだりし

て、股の下から糸を引いたまん汁が敷かれたマントに落ちる。柩は台に額を押しつけ、肩で息をした。何も言わない。荒い鼻息が引き窓まで届いた。

砥浪は濡れた指のままふところから栗をひとつ出し、奥歯で割った。

「早えのはお前だ。そこから先は俺が握ってる。いつやるかは俺が決める。明日もだ」

柩の背中がもう一度波を打った。額は台から上がらない。

樟は頬の手ぬぐいがすっかりぬるくなっているのに気がついた。

足もとの桶に浸し直したいが、水の音が立つ。あきらめて痛み止め

の木の実をひと粒、痛む齒の上にのせた。

「……検分は終わりですか」

砥浪は首を横に振った。

「終わるもんか。こつちを向け。お前の鼻を使う」

砥浪は下穿きの前を開けた。出てきたちんぽは樟が思わず自分の腕と見比べたほど太かった。長さはそれほどでもない。そのかわり幹が丸太のように詰まっていて、黒い毛に埋まった根元から上へ反っている。皮を半分かぶった先は赤黒く、もう濡れていた。その下に下がった金玉は握り飯ほどもあって、左右が互い違いに重く揺れる。

杵は振り向いてそれを見た。耳が両方ともぱたりと横へ倒れた。

砥浪は右手の親指で自分の先から垂れる汁をすくった。同じ手の中指には杵のまん汁がまだ光っている。左手を杵のあごの下に当て、顔を上げさせてその二本を鼻の前へ出した。

「どっちがどっちだ。嗅ぎ分ける」

杵の鼻は言われる前からひくついていた。親指をひと息嗅ぎ、中指を嗅ぐ。

「親指が砥浪さんです」

「俺のはどんな匂いだ。荷にやるように細かく言え」

「……塩が、きつい。焦がした栗の渋皮と、けものの脂。それに、雨の前の土です」

「もう片方は」

「薄い。水で割った甘酒みたいで、青い草と、少し鉄の……」

柩の鼻先は中指の前に長くどどまっていた。砥浪が片方の眉を上げる。柩は顔を横へそらし、あごの下の手を払った。その内腿を新しい筋がひとつ、膝へ向かって下りていく。

「自分の匂いのほうが好きか」

「荷は分らない物ほど長く嗅ぐんです。砥浪さんのはひと息で分かった。それだけです」

「ひと息で覚えたんだな。なら忘れるな。明日は一日その匂いの下で荷を嗅ぐんだ」

砥浪は腰掛けに戻り、膝を大きく開いて座った。ちんぽが腹の前で脈を打って揺れる。

「握れ。調べ印を持つときのあの手でだ。俺は毎日あれを見てた。札にくれてやるには惜しい手だ」

「調べ印の柄は桜です。こんな節くれた薪と一緒にされたら印が怒る」

「怒らせとけ。膝をつけ」

杵は鼻で笑った。笑った鼻はすぐ続けざまにひくつき、膝のほう
が先にむしろへ下りた。砥浪の膝のあいだである。裸の体が樟のほ
うへ横向きになる。胸は板のように平らで、小さな乳首だけが固く
とがっていた。右手を上から伸ばし、幹のまんなかを握った。指が
回りきらない。親指と中指のあいだに指二本ぶんのすきまが残っ
た。

「……太い。柄が悪いにも、ほどがある」

「ぐ、……」

握ったこぶしがまっすぐ下へ下りる。皮がめくれて赤黒い先が丸
ごと出た。根元まで下りた所で杵の手は一度ぴたりと止まり、手首

を返してから上へ戻る。札に印を押すときと同じ止め方である。戻った手のあとには青い指の跡が幹に巻きついて残っていた。

柩の手が止まった。自分の青を見ている。

「誰が止めていいと言った。色がつくならつけろ。お前の手の色だ、俺がもらう。……動かせ」

砥浪の右手が柩の左の角の根をつかんだ。引き寄せて顔を下へ向けさせる。左手は腰掛けのふちを握り、板をみしみし言わせている。柩の鼻先は濡れた先のすぐ上に来た。

柩はまた手を動かした。下ろして、止めて、返して、上げる。先から垂れた汁がこぶしに巻きこまれて、にち、にち、とねばる音に

なった。上げるたびに皮が先を包み、下ろすたびにむける。青い跡は重なって幹じゅうがまだらに染まっていた。桎は上げきった所で親指を先にのせ、割れ目からにじむ汁を赤黒い頭に塗り広げた。親指の腹にも青が残っていたらしく、頭のとっぺんに丸い跡がひとつ付いた。

「ぐ、うゝ……そこだ。もう一ぺん、やれ」

「頭にまで青が付きましたよ。ひと月は落ちません。知りませんか
らね」

桎の親指がもう一度、先を丸くなでた。砥浪の太い腿が桎の肩の両側でびくりと震える。

「ふうっ、おゝ……、下もだ。金玉も持て。昼から張って痛え。お前が張らせたんだ」

杢の左手が金玉を下からすくった。片手にはのりきらず、ひとつが指のあいだからこぼれて、重たげに垂れる。杢はそれを手のひらで持ち上げ直し、目方を確かめるように軽く揺すった。毛の生えた皮に青い指の形がついた。

「重い。……こんなに何を詰めてるんだ」

「お前を見てて、たまった分だ。おゝ、ぐ……っ、杢、鼻、もつと寄せろ。嗅ぎながら、やれ」

角を引かれて杢の鼻は先の割れ目に触れるほど近づいた。鼻が続けざまに動く。息を吸うたび裸の腹がへこんだ。膝立ちの腿が内側へ寄り、こすれ合いかけてまた開く。膝のあいだのむしろには黒いしみが広がっていた。まんこからは握っているあいだじゅう、まん汁が落ち続けている。

「んゝ……、っ、ふ、」

「お前も、鼻が鳴ってる。……その音だ。札を嗅ぐときより、低い。もつと、ぐ、うゝ……！」

砥浪の腹が固く締まった。金玉が杢の手のひらの中でせり上がる。杢のこぶしが根元へ下りて癖で止まった。

「止めたんなら、締めろ……っ！」

柁は止めたままぎゅっと握った。

白いザーメンが先の割れ目から太く噴き出した。最初のひと筋は柁のあごを打ち、唇と鼻の下へはねた。砥浪は角をつかんだ手を離さない。顔をそらせない柁の頬へ、のどへ、次の筋がかかる。びた、びた、と重い音がした。ひときわ長いのが左の肩に落ち、二の腕の腕章までべったりと垂れた。

「おゝ、おゝお……、っ、は……」

砥浪は牙をむいてうなり、腰掛けの上で続けざまに腰を浮かせた。柁の右手は握ったままで、指のあいだから白いのがあふれ、青

い跡の上を流れて金玉を持つ左手にたまった。

出しきると砥浪は角から手を離れた。杵は顔を上げない。鼻の下に垂れたザーメンごと、ひとつ深く息を吸った。

「……栗の渋皮じゃ、ない。生の山芋を、すった匂いだ」
「杵」

「濃い。鼻の奥に、貼りつく。……こんなの、明日まで取れない」

杵の腰は膝立ちのまま前後に揺れていた。何にも当たっていないのに尻だけが浅く行き来する。砥浪はそれを見下ろしてのどを鳴らした。出したばかりのちんぽが腹の前でまたひとつ脈を打つ。伸ば

した手は杵の股へは下りなかった。あごに垂れた白いのを親指ですくい、唇の上へなすり上げる。

「腰が動いてるぞ。何に擦るつもりだ。……今夜はここまでだ。帰っても自分でいじるな。いじったら朝に匂いで分かる。分かったら、その日は赤を押さねえ」

杵の手が水桶の手ぬぐいへ伸びた。砥浪の足が先に桶を腰掛けの下へ引きこんだ。

「拭くな。乾くまで俺のをつけてろ。長屋までの道は暗い。嗅げるのはお前の鼻だけだ」

杙は砥浪をにらんだ。手の甲であごをぬぐいかけたが、その手にも指のまたまで白いのがたまっている。手は下りた。腰はまだ浅く揺れていた。

杙は立ち上がった。膝がぐりと一度折れかけ、腰掛けのふちをつかんでこらえる。台の端の下穿きを取って足を通すと、濡れた内腿に布が貼りついて引き上げるのに手間どった。上着を着て帯を締め、腕章を袖の上に結び直す。白いのが染みた所は布の色が濃い。マントを釘から取った。

砥浪は腰掛けからその背中に言った。

「夜明けの鐘で戸板を上げる。その前に来て、俺の前で下穿きを脱げ。明日は腰から下に何もはかせねえ」

「……水桶は台の左に置いてください。右だと印肉に袖が当たります。それから握り飯は自分で握ってきます。砥浪さんのは味噌がきつくて札に匂いが移る」

「左だな。置いとく。……鼻の下、乾いてきたぞ」

柩は息を吸いかけて止めた。止めきれずに鼻が鳴る。

「窓口は空けません。副印の柄をみがいておいてください」

柩は戸を引いて暗い外へ出ていった。敷居をまたぐ足が上がりきらず、つま先が木を打つ。角の影が戸口をくぐり、そろわない足音

が柵に沿って遠ざかった。

ろうは、台の端の札の束の横に見えている。けれど今あの戸を叩く気にはなれない。写しは封をしないまま帳面に挟み、明日の朝、窓口が開く前に借りることにした。奥歯はまだ脈を打っている。

引き窓を閉めようと手をかけて樟はもう一度だけむこうを見た。

砥浪は台の前に落ちたままのマントを拾い上げていた。柵の立っていた所だけ毛織りが黒く濡れている。そこへ広い鼻を埋めて長く吸い、濡れた側を内にして肩へ掛け直した。前を開けたままの股では、出したばかりのちんぽが重く垂れ、先から白い残りを糸にしてむしろへ落としている。幹にも金玉にも青い指の跡がまだらに残っ

ていた。砥浪は拭かなかった。青いままの物を両手で下穿きの中へ押しこみ、栗をもうひとつ奥歯で割った。

第二話　婆さんの手

雨は夜のうちに上がったのに記録小屋の屋根はまだ水を落としていた。

樟は机を引き窓の横まで引きずって、帳面を残らずその上へ逃がした。漏る所には手桶を置いた。床板にはもう水が広がっていたので、手ぬぐいを雑巾がわりにして板壁のきわまで這って拭いていた。板壁の下のように、板の合わせ目が床から膝の高さまで細く開いたすき間があった。頬を寄せるとそこから検分小屋がのぞけ

る。腰の高さの引き窓と同じで、窓口に立つ者を真横から頭から足もとまで見る向きである。

むしろの上に裸の足が立っていた。くるぶしの細い杵の足だ。その後ろに砥浪があぐらをかき、麻紐の端を牙で噛み切っている。

「紐は札を束ねるのに使うんです。無駄に切らないでください」

「ひと巻きだけだ。尾が下りてくると白い毛が見えねえ」

杵は関所番の上着を着て帯を締め、左の袖に腕章を結んでいた。腰から下には何もはいていない。下穿きはたたんで腰掛けの上にある、その横に竹の皮の包みがのっている。窓口の戸板はまだ下りたまま、外から馬の鼻息と並んだ人の咳が聞こえた。

砥浪は膝立ちになり、杵の短い尾を指でつまんで持ち上げた。付け根に麻紐をひと巻きして端を背中へ引き、帯の後ろに結びつける。尾に回した輪はゆるい。尾は下りようとして紐を張り、付け根の白い毛を逆立てた。下りきれないまま小さく震えている。横からのぞく樟にも丸い尻の下が何にも隠れていないのが分かった。

「……きつくは、しないんですね」

「きつく縛ったら引っぱってるのが見えねえだろ。お前の尾は焼けた栗みてえにはぜる。口より先に、はぜるんだ」

「尾に物を言わせたいなら鹿でなく犬を雇えばいいでしょう」

「犬じゃ腹が鳴らねえんだよ、俺は」

砥浪は尾の裏の白い毛へ鼻息をひとつ吹きかけた。尾がはね、紐がぴんと鳴る。杵の足の指がむしろをつかんだ。

「ほら、はぜた。口はまだ犬の話をしてるのにな」

砥浪の鼻先が杵の左の袖に寄った。腕章の布はまんなかだけ色が濃い。

「洗ったのか、それ」

「夜のうちに、あくで。跡は落ちませんでした。匂いも、まだ……」
杵は左腕を体から離して持ち、顔をそむけている。「関の腕章です。汚れたまま人前に出るのは、腹が立つ」

「俺のほうも落ちねえぞ。湯で洗っても灰でこすっても、ちんぽが青いままだ。お前の印肉は何で練ってある」

「藍と油です。ひと月は落ちません」

「ひと月か」砥浪の牙のあいだから笑いのような息がもれた。「そりゃあ、いい」

夜明けの鐘が鳴った。枳は台に手を伸ばし、戸板を押し上げてつかい棒をかませた。朝の光が窓口から差しこんで枳の胸から上を白く照らす。腰から下は板壁の陰に入ってたままだった。

砥浪は台の下へもぐりこんだ。板壁に背中をつけて座り、枳の両の足首を左右の手でひとつずつつかむ。そのまま外へ引いて足を肩

の幅より広く開かせた。広い鼻先が枳のへその下に押しつけられる。

「お早うございます。札と荷札を台の上へ」

樟は手ぬぐいを絞るのを忘れてすき間に目をつけていた。

砥浪が口を開ける。出てきた舌は樟の手のひらほども幅があつて厚かつた。それが割れ目の下の端に当たり、上へ向かつてゆつくりなめ上げる。閉じていたまんこの肉が舌の幅に押し分けられて左右へ開いた。上の端まで来ると舌の先がとがって、皮をかぶったクリをつつく。

枳のくるぶしに筋が浮いた。

「塩、ですね。宿場の、問屋あて。……樽の、ふたを」

「関所番さん、ゆうべの雨で道がぬかってね。昼までに下りたいんだ、早いとこ頼むよ」

「ふたを開けてこちらへ寄せてください。早く済ませたいなら、なおさらです」

商人の足音が荷車の後ろへ回っていく。

「……甘え」砥浪は口を離さずに舌の横から声を出した。「朝いちばんの沢の水だ。腹の底までしみやがる」

ぴちゃ、と犬が水をなめるような音がした。砥浪の舌は休まない。なめ上げては戻り、戻るときには鼻先でクリを押していく。猪

の鼻は平たくて湿っていて、押されるたびに枳の下腹がへこんだ。

口の端の牙が内腿の柔らかい所に当たって白いくぼみを作る。

樟は立ち上がった。手桶の水がふちまで来ている。替えの桶を置いて腰をかがめ、引き窓から検分小屋をのぞいた。

枳は細い竹の棒を窓口の外へ伸ばし、樽の中を突いていた。棒の先を引き戻して鼻に寄せ、うなづく。顔は落ち着いている。けれど鹿の耳は両方とも後ろへぺたりと寝ていた。

足もとから低い声がした。

「耳」

杵の肩がこわばった。眉のあいだにしわが寄り、耳がぎくしゃくと起き上がる。立てようと力を入れたせいで商人をにらむような顔になった。

「な、何だい。塩だよ、底まで塩だ」

「ええ。底まで、塩でした。……調べ、ました」

杵は調べ印を青い印肉につけ、札にまっすぐ下ろした。押しきつた所で一度止めて手首を返す。砥浪が台の下からはい出して杵の横に立った。口のまわりから鼻先まで濡れて光っている。それを手の甲でひとぬぐいして腰の革袋から許可印を出し、青の隣に赤を押した。

塩の商人は札をふところに入れ、馬の口を取って門をくぐった。

砥浪はまた台の下へ戻った。今度は左手だけで杵の左の足首をつかみ、右手を腿のあいだへ上げる。

「次の方。……炭、ですか。俵の縄を、ひとつ解いて」

樟は濡れた手ぬぐいを持ってもう一度床にかがんだ。拭く所はまだ残っている。

すき間の向こうで砥浪の太い中指がまんこの口に当たっていた。舌はクリに貼りついたまま指だけがぬるりと沈む。杵の膝が内へ寄りかけ、足首をつかんだ左手に引き戻された。指が中で曲がる。舌

の先が皮をめくってクリを直にこする。まん汁が砥浪のあごの毛を伝い、のどへ流れてむしろにぽたぽた落ちた。

「いゝ……っ、す、みません。俵の、底の、ほうも」

「底？ 底も炭だよ、番人さん」

「しめって、いると、目方が、……あ、っ、変わリ、ますので」

砥浪の鼻から荒い息が噴き出した。杵の下腹の毛がそれで揺れる。指が速くなった。ぐち、ぐち、と粘る音が台の下にこもる。杵のかかどがむしろから浮いてつま先だけで立った。尾は紐をいっばいに張り、尻の肉がきゅっと寄る。

そこで、指が抜けた。舌も離れた。

杵の足は開いたまま震えていた。台の上で調べ印が印肉の皿のふちを打ち、もう一度下りてや々と青を拾う。砥浪は濡れた指を自分の口に入れ、音を立てて吸っている。

「……調べ、ました。どうぞ」

杵が印を押すと、砥浪は吸った指を下穿きの腿でぬぐって立った。「峠は晴れてるぞ」と炭の男に言って赤を押し、また戻ってくる。台の下に座り直して自分の下穿きの前を上からつかんだ。布が中から突き上げられて大きく張っている。顔をしかめたのはそこだけ、手はすぐ杵の足首へ戻った。

「砥浪さん」 柎は札から目を上げなかった。「途中で放るなら、初めからするな。……俺の鼻にあんたの匂いがまだ残ってる。その中で炭の匂いを嗅ぎ分けたんだぞ」

「放ったんじゃない。取り上げたんだ。湿った俵を言い当てたのは聞いてた。あの声を出してるあいだ、お前のまんこは俺の指をかんでたぞ」

「……かんで、ない」

「かんでた。まだ口が開いてる」

砥浪の親指がまんこのふちをひとなでして離れた。ぬち、と音が立つ。柎の膝がかくんと抜けかけ、台をつかんだ手で止まった。

「前を向け、次が来た。顔は荷主に見せとけ。声は俺が下で聞く」

樟は桶を抱えて戸口へ行き、水を外へあけた。戻って引き窓の前に立ったときには窓口に小さな婆さんが来ていた。背負子に干したぜんまいの束を山ほどくくりつけ、腰を曲げて台のふちにあごをのせるようにしている。

「宿場の市へ、ぜんまい。……札は、こちらで」

「はいよ。ここの番人は調べが細かいって谷じゃ評判だよ」

柁は台から身を乗り出して棒を伸ばし、束のあいだを突いて匂いを嗅いだ。乗り出したぶん尻は後ろへ突き出ている。台の下では砥浪の頭が柁の股に埋まったまま浅く上下していた。あごの先しか見

えない。水っぽい音が切れ目なく続いている。柩の耳は立ったまま小刻みに震え、やがて左右へ羽を広げるように倒れていった。

婆さんがしわだらけの顔を上げた。

「あんた、耳が寝てるよ。腹でも下したのかい」

台の向こうから枯れ枝のような手が伸びた。柩の左の耳の先を指でつまむ。

柩の体がびくんと上へ伸びた。腿が内へ閉じて砥浪の頭を両側から挟む。むしろを蹴る音がした。んゝむ、とくぐもった砥浪の声も聞こえた。

「おや、びくびくしてるじゃないか。わなにかかった兎みたいだね」

「は、らでは、ありません」 柩は台のふちを両手で握った。「ゆうべの、雨です。鹿の耳は雨の前と後で向きが変わります。山の向こうで雷が鳴れば、片方だけ寝ることもある。それに今朝は夜明け前から水桶を運びまして、寝が足りていないだけで、いゝ……足は、立って、いますし、鼻も利いています。現におばあさんのぜんまいは、去年のを下に今年のを上に詰めてあるでしょう。匂いが違う。そういうことは分かるんです。耳がどちらを向いていようと、調べに障りはない。腹を下していたら窓口には立ちません。いえ、立ちますが、立っていても、荷に障る腹では、あ、ない、ので……」

「去年のを下にしたのは内緒にしとくれよ」婆さんは耳をつまんだまま指で先をもんだ。「番人の言い訳つてのは荷主より長いんだねえ。かわいそうに震えてるよ」

「これは、腹を立てて、いるん、です。耳を、つままれて……っ。手を、離して、ください。耳は、調べる所では、ありません」

「はいはい」

婆さんの手が離れた。杵は調べ印をつかみ、印肉に押しつけ、札に下ろした。まっすぐだった。ただ柄を握るこぶしの節が白くなっている。

砥浪が杵の足もとから立った。口のまわりはさつきより濡れて、あごの毛の先からしずくが落ちてゐる。婆さんがそれを見上げた。

「検分役、朝から何を食つてたんだい。口じゅう、べたべたにして」

「山の物だ」砥浪は手の甲で口をぬぐい、その手をなめた。「今朝のはとびきりうまい。婆さんのぜんまいより、ずっとな」

「口の悪い猪だよ。この子をちつと休ませておやり」

「休ませたら婆さんのぜんまいが山で夜を越すぞ」

赤い印が押された。婆さんは札を帯にはさみ、背負子を揺すり上げて門をくぐっていった。

列がひととき切れた。柩は台の左の水桶からひしゃくで水をくみ、のどを鳴らして飲んだ。飲みきれなかった水があごから上着の胸に落ちる。残りを足もとへ下ろした。台の下へ座り直していた砥浪が同じひしゃくに口をつけた。

「耳をさわられた」柩は列のほうを見たまま齒のあいだから声を出した。「あの人の指が来たとき、あんた舌を中に入れただろう。わざとだ」

「わざとだ。婆さんの指でお前がはねたのが気に食わねえ。はねるんなら俺の舌ではねろ。……腿で俺の頭を挟んだな。あれはお前が自分でやった」

「蹴るぞ」

「蹴ってみろ」

杵の左足が砥浪の膝へ飛んだ。砥浪はその足首を宙でつかまえ、下ろさせずに外へ引いた。片足で立たされた杵の股が大きく開く。厚い舌が割れ目を下から上までひとなめにした。

「あゝ、ひ……っ！」

杵の両手が台のふちに落ちた。立っているほうの膝が折れかける。砥浪はつかんだくるぶしの骨に牙を軽く当ててから、足をむしろへ返した。

「細え足だ。くるぶしがむいた栗みてえに出てる。蹴る足も、開かせりや同じ味がするんだな」

「……昼の、握り飯は、分けてやらない、からな」

次の荷車の音が近づいてくる。砥浪は台の下から出て杙の真後ろにあぐらをかき、右の膝を立てた。厚い麻の下穿きに包まれた膝頭を、後ろから杙のまんこの真下へ差し入れる。両手は杙の尻の肉を左右からつかみ、外へ開いた。

「乗るなよ。当ててるだけだ」

「……っ」

樟は机の帳面に落ちたしずくを袖で押さえ、それからまた床へかがんだ。桶の下にも水が回っている。

すき間から見ると柩は少し腰を落とした形で膝頭の上に股を浮かせていた。麻の布が、開いたまんこの下からクリまでを軽く押し上げている。乗れば楽になる高さだ。柩は乗らない。腿の裏とふくらはぎに筋を立て、布に触れるか触れないかの所で腰を止めている。

「干し柿ですね。宿場の、菓子屋あて。……箱を、こちらへ」

「へい。番人さん、汗がすごいね。今日は蒸すかい」

「鼻を、使うと、汗が出るんです。鹿は」

砥浪の膝がわずかに上がった。布がクリをこすり上げる。杵の腰が前へずれ、後ろへ戻った。膝頭の麻は当たっている所から黒く色を変えていく。布の目にまん汁がしみてこすれるたびに、じゅ、と湿った音がした。

「あゝ……箱の、すみに、青い、かびが」

「え、どこだい」

「右の、奥、ですうゝ……ごほつ。失礼。奥の、ひとつ。それは、抜いて、ください」

杵のふくらはぎがぐくぐ揺れだした。腰が下がる。布にまんこがべたりと貼りつき、尻が前後に動いた。砥浪は尻をつかんだ両手

に力をこめ、開いた谷間をのぞきこんでのどを鳴らした。

「杙、乗るなど言っただろ。……乗ったな。なら擦れ。俺は動かさねえ。お前の腰で俺の膝をびしょびしょにしろ」

杙の尻の動きが速くなる。尾が紐を引き、腰の帯が後ろへずれた。鼻から抜ける息が短く、高くなっていく。

砥浪は膝を下げた。

杙の股の下に何もなくなつた。支えをなくした腰がぐんと落ちかけ、台をつかんだ腕でどうにか止まる。へその下が大きくへこんでは戻り、立てていた耳が左右ばらばらに倒れた。濡れたまんこは何にも当たらないまま朝の冷えた風にさらされている。

「ひ、い……っ」

「調べは済んだかい、番人さん」

「……す、み、ました」

砥浪が立った。息も乱していない。右の膝頭には手のひらほどの黒い濡れ跡がある。そのまま柩の横へ出て窓口から顔を見せ、赤を押した。干し柿の男の目に入るのは砥浪の胸から上だけだ。柩は顔を前に向けたまま目だけを下へ落としてその膝を見ていた。耳の裏まで赤い。

「拭かねえよ」砥浪は印を革袋に落としながら低く言った。「昼までこの膝で赤を押しに出る。お前が自分で塗ったんだ」

枳の鼻から細い息が抜けた。台をつかんだ腕はまだ腰の重みを支えている。

干し柿の荷車が動くとすぐ次の男が台に札を置いた。若い桶屋だった。背中に新しい桶を重ねてしょっている。

砥浪は台の下へ戻らなかった。枳の真後ろに立ち、肩ごしに札をのぞく格好をする。右手は許可印を持って台の上に置いた。左手は板壁の陰で自分の下穿きの前を開けた。

樟はすき間の前で手ぬぐいを握ったままになった。

出てきたちんぽは朝の光の届かない板壁の陰でも太さが分かった。先は皮がむけきって赤黒く張りつめ、汁を垂らしている。砥浪

は空いた左手で枳の左の腰骨をつかみ、腰を前へ出した。太い幹が尻の谷間に下から割りこむ。先が紐で上げられた尾の裏を突いた。

「っ、……桶、ですね。宿場の、宿屋あて」

「ああ。たがは竹だ。見るかい」

「見ます。ひとつ、こちらへ」

砥浪の腰がゆっくり上下しはじめた。丸太のような幹がケツ穴の上をこすって行き来する。枳の小さな尻では挟みきれず、幹の両側がはみ出していた。腰が上がるたび、垂れた重い金玉が開いたままのまんこの口を、ぺた、とたたく。たたいては離れ、まん汁の糸を引く。

「いゝ……あ、……たがの、合わせ目は、いい、です。底板を」

「底板も杉だよ。検分役まで出てきて見るほどの物かね」

「こいつがていねいに見るんでな」砥浪の声は食いしばった歯のあいだから出ていた。「俺は押すだけだ。この鼻が通した物なら俺は目をつぶって赤を押せる」

「へえ。いい番人を持ったね、検分役」

「ああ。……よそへはやらねえ」

先から出る汁と谷間に流れたまん汁で、幹はぬるぬると滑った。

砥浪の腰が速くなる。金玉が続けざまにまんこをたたき、たたかれるたびに杙の声が鼻へ抜けた。杙は桶の底板を指でなぞり、鼻を寄

せ、うなずく。その手が震えて桶のふちが台に当たり、かたかた鳴った。

「……調べ、ました」

調べ印が印肉の皿を打ち、札に下りた。押しきった所で枳の手はいつもより長く止まっていた。

「枳」砥浪は枳の耳のすぐ後ろで齒のあいだから低く言った。「尻を締めろ。締めて、俺のを挟め。手は台から離すな」

枳は前を向いたまま尻の肉をきつく寄せた。尾の紐がぴんと張る。

「うゝうゝ……っ」

砥浪の太い首に筋が浮いた。腰をいちばん上まで突き上げ、そこで止める。先が尾の裏の白い毛にもぐった。ザーメンが紐の巻きついた尾の付け根に、どぶ、とあふれる。次のが帯の結び目を越えて上着の背にかかった。あとからあとから出て、谷間を伝って下りていく。ケツ穴を越え、開いたまんこのふちまで流れて、そこから白いしずくになってむしろへ落ちた。

同じとき、砥浪の右手は青の乾かない札に許可印を押しつけていた。

「検分役、ずいぶん力を入れて押すんだな。朱がにじんてるよ」

「……朱肉が古くてゆるいんだ。味噌と同じで古いとにじむ」

桶屋は首をかしげ、札を取って門をくぐった。

柩は台に両ひじをついていた。むしろの上で足の指がわらをつかんで放している。尾は上がったままで白く汚れた尻の下を隠せない。垂れてきたザーメンの匂いに鼻が続けざまに鳴った。押し終えた調べ印を握った右手だけは台の上でまっすぐ立っている。

「……尾の紐に、かかった」柩は顔を上げずに台の板に言った。「札を束ねる紐だぞ。それに、匂いが、尻から上がってくる。生ぐさくて、濃くて、塩も炭も干し柿も、みんなその下だ。これで、どうやって、荷を嗅げっていうんだ」

「嗅げ。俺の匂いの下から塩と炭を分ける。お前の鼻ならやる」

「分けてやる。分けてやるから紐はあんたが洗え」

「洗わねえ。紐はそのまま乾かす。日が暮れて俺がほどこまで、お前の尾は俺のを巻いて上がってろ」

砥浪は桎の後ろに立ったままだった。出したばかりのちんぽはもう固さを戻しかけている。先に残った白いのを桎の右の尻へなすりつけてから、前を合わせた。桎の左手が台の端の手ぬぐいへ伸びる。砥浪はそれを先に取って自分の口のまわりをぬぐい、台の下奥へ放った。

「拭くな。垂れるまま立ってろ。昼まで持たせるんだ、桎。持たなかったら、その先は俺が決める」

杢は返事をしなかった。白いしずくが内腿を伝って膝の裏へ下りていく。寝ていた耳を立て直そうとして、立ったのは右だけだった。次の札を取った青い指は、字のないほうを上にして台に置いた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 関所番、猪の検分に副印の代価で種を残され屈する

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・10・7

レーティング R18